

氏名	金 嬪娜		
ヨミガナ	キム ビンナ		
学位の種類	博士 (学術)		
学位記番号	博音第320号		
学位授与年月日	平成31年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉アートプロジェクトにおけるサポーター/ボランティアのあり方		
論文等審査委員			
主査	東京藝術大学	教授 (音楽学部)	熊倉 純子
副査	東京藝術大学	教授 (音楽学部)	毛利 嘉孝
副査	東京藝術大学	教授 (音楽学部)	亀川 徹
副査	東京藝術大学	特任教授 (音楽学部)	長島 確
副査	高崎経済大学	教授 (地域政策学部)	友岡 邦之

(論文内容の要旨)

本研究はアートプロジェクトの現場で活動するサポーター/ボランティアのあり方について考察し、またその特徴を考えるものである。今日、日本全国では多数のアートプロジェクトが実施されており、サポーター/ボランティアはその現場を支える重要な存在となっている。本研究では、彼らの参加動機、活動内容、彼らが実施する自主活動などを詳細に描き、アートプロジェクトを現場にするサポーター/ボランティアへの理解を広げることを目的にしている。

本研究では「当事者」と「自主決定権と管理」を分析の枠と設定した。アートプロジェクトを活動の場とするサポーター/ボランティアに関する、これまでの研究動向をみると、初期から浮き彫りになっていた「当事者」という認識がその後の研究には積極的に反映されていない。また、アートプロジェクトのサポーター/ボランティアに対する批判的な立場においては、個々の当事者の参加理由及びその思惑という側面が考慮されていないことから、「当事者」を軸にその活動を考察する。

もう1つの分析の軸はボランティアに対する「自主決定権と管理」の側面である。災害ボランティアでは、活動の場が被災地ということから、個々人の自由な参加形態より、組織レベルの管理が優先されている。東日本大震災以降、ボランティアセンターの設置及び運営に集中する初期段階の対応において批判の声がある一方、いまだに自治体や全社協が中心となる体制は強固で、個人や団体の自由な活動は批判的になっている。この「自主決定権と管理」という観点は、アートプロジェクトを中心に活動するボランティア/サポーターとその他の事例においても、現場のあり方を決める大きき要因になっていた。

筆者は4つの事例を対象にこれまで参与観察及びインタビュー調査を行ってきた。そのために、本研究で扱う資料は、個人インタビューやグループインタビュー資料をはじめ、サポーター/ボランティアの活動を記録した観察ノートと、各事例の主催側で発行した書籍などを主な資料として分析を行なう。

本研究の構成は次のようである。

第1章では、美術館の事例を扱う。長年文化ボランティアの活動の場としてあり続けてきた美術館のボランティア活動を検討することは、今日の文化ボランティアの様子を理解するのに必要な作業である。1995年に開館した豊田市美術館の「作品ガイドボランティア」は約20年の歴史を持っている。10周年の際には記念誌を発行するなど、美術館側もボランティアの活動歴のきちんとまとめてきた。本研究では、「作品ガイドボランティア」と美術館の関係性に注目しながら、「作品ガイドボランティア」の活動を総合的に検討する。

第2章では、大型芸術祭である「横浜トリエンナーレ」のサポーター、「ハマトリーツ！」の事例を取り上げる。本研究では、2015年から2016年までの約1年間を集中的に扱う。2017年度の「横浜トリエンナーレ」の準備期間であるこの時期に行われた「ハマトリーツ！」の自主活動を対象に、大型芸術祭におけるサポーター活動のプロセスを詳細に述べる。また、自主活動を展開する中で見えてきたサポーターと主催側の思惑の差を確認する。

第3章で扱う事例は、「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」のサポーター「ヤッチャイ隊」である。この章では個人レベルにおける参加動機と活動を通じて「当事者」の意識とそのあり方を確認する。そのために、前半ではサポーター個人のライフストーリーを中心に、サポーターとして関わった理由と各々の活動を詳細に語る。後半では、このような人々にとって「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」という場が持つ意味を考察し、今日におけるアートプロジェクトという現場のあり方を明らかにする。

第4章では、「水と土の芸術祭」のサポーター組織である「市民サポーターズ会議」を事例にする。2008年の設立以来、これまでさまざまな自主活動を展開してきた「市民サポーターズ会議」は、サポーターの枠を超えた活動を多数行ってきた。第4章では、組織単位で展開されてきたこれまでの自主活動の実態を詳細に述べ、サポーターによる組織とその自主活動が持つ社会的意義について考察する。

終章では、本研究で扱った4つの事例から浮き彫りになったサポーター/ボランティア活動の相違点と特徴、そしてこれらの活動が持つ社会的意義についてまとめる。

(総合審査結果の要旨)

本論は、文化施設や芸術祭・アートプロジェクトなど、4つの事例を対象に長期に渡って参与観察やヒアリング調査をおこない、ボランティアあるいはサポーターと呼ばれる、市民参加型文化事業に集められた人々の様子を詳述した労作である。

先行研究には主に社会関係資本の観点からボランティア／サポーターを論じた調査研究は多数存在するが、本論はその実態を詳らかにした点で高いオリジナリティが認められる。さらに市民参加型事業が人々の文化資本形成にどのように作用し、どのような形で社会関係資本が醸成され、ひいては主体的市民活動の萌芽となりうるのかを明らかにした点で、特筆すべき貢献を果たすものと評価できる。

留学生とは思えない闊達な文章で鮮やかに活写される4つの現場の様子は、インタビューの生の声と参与観察の分厚い記述によってリアリティに満ちた訴求力を伴って読者に迫る。主催側の思惑に対して時に従順で、時に葛藤し、無頓着であったり批判的であったりするボランティア／サポーターたちの様子は、客観的な距離を保ちつつ、筆者独自の批評的な視点が光る描写となっている。

豊田市美術館、横浜トリエンナーレ、音まち千住の縁、水と土の芸術祭という4つの事例で、人々はまったく異なる現場を形成している。文化施設のガイド・ボランティアたちが施設への従属感こそに満足を感じているのに対し、大型芸術祭の現場では、自らの高い教養を反映した市民事業を企画せんと長期に渡って努力しつつも、最終的には大規模芸術祭に回収されてしまう様が悲哀を漂わせる。音楽を中心としたアートプロジェクトでは、自身の音楽観を自由にはばたかせることのできる現場で人々は奔放にサード・プレイスを形成している。そして地方都市である新潟市では、行政主催の文化事業を市民たちの独自プロジェクトが席卷しそうな勢いで、まさに草の根民主主義の萌芽が感じられる。

論文冒頭で、ボランティア論全般の整理をおこない、災害現場のモンスター・ボランティアを巡る論議紹介しつつ、「秩序化ドライブ」と「遊動化ドライブ」という理論モデルの分析をしたにも関わらず、終章でそれを回収して文化ボランティアならではの特性を理論化するに至っていない点が残念であるが、しかし、「当事者性」と「自主決定権と管理」のジレンマという視座に貫かれた本論のオリジナリティが損なわれるものではなく、学位授与に十分値するものと評価された。